

各駅停車・大分県歴史散歩

ふるさと駅

(12) 豊後中村・宝泉寺

初版：2007年5月18日

⑤1 野矢・豊後中村

九重山群の登山駅



●この電子ブック「ふるさとの駅」＝各駅停車・大分県歴史散歩は、昭和58(1983)年7月20日から翌年の1月28日までの約半年間、115回にわたり大分合同新聞に連載されたものです。25年後の今年、電子ブックとして復刻しました。

したがって記事中の「いま」や「現在」は25年前の状況を示しており、その後駅名の変更や路線の廃止などもありますが、当時を思い浮かべながらお読みいただきお楽しみください。

◀ 珪藻土の採掘・乾燥場

■広がる原野と渓谷

水分峠は大分川と玖珠川の分水嶺(れい)である。水分けは水配りでミクマリと呼ぶところが多いようだが、ここは単純にミズワケである。

久大本線は由布院盆地から四つの長いトンネルで越す。4番目が最も長くおよそ1850メートル。トンネルのほぼ中央部が標高607メートルで久大本線の最高点。峠を通過したことは、どちらから行っても列車のスピードがその地点から早くなるのですぐにわかる。

国道210号線の峠はトンネルより少し北にあって標高707メートル。九州横断道路の有料区間・別府阿蘇道路が峠の頂でわかれている。

峠からひとくだりで野矢駅。標高543メートルで、久大本線最高所の駅を示す標柱がホームにある。かつて野谷と書かれたこともあるように、原野と溪谷の地だが、駅から東南に入った谷間の滝上には長祿2(1458)年の六地藏石幢があったり、さらに南には寺院跡と考えられる寺床の地名をもつ集落がある。

また、駅前から西に行くと国道210号線に出るが、その北には落人伝説を色濃く残したその名も平

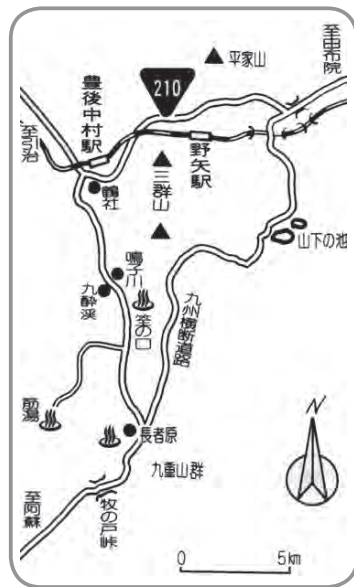
家山がある。駅一帯の野原はワラビがりなどでにぎわうところ。

■紅葉の名所・九酔溪

豊後中村は九重山群への登山口の駅として有名である。6月第2日曜日の山開きを皮切りに、夏休み中は特ににぎわう。列車は着くたびに、大きなリュック、小さなリュック、色とりどりの服装の登山客が吐き出される。ホームを歩く姿を見るだけで、登山に年季が入っているかどうかもわかる。

ホームに高山植物の解説板があったり、集落札口の上に大きな山小屋風の看板があるところなど、いかにもこの駅らしい。駅前には連絡バスのターミナルがあり、町筋はちょっとした商店街になっている。

九重山群についてはバス路線のさいに述べるが、行く途中の九酔溪(九翠溪)は紅葉の名所として知られている。玖珠川上流部の峡谷から飯田高原に登るところにあり、道はひどいカーブと急坂。昔は



野矢駅開業：大正15
(1926)年11月26日

豊後中村駅開業：昭和3
(1928)年10月28日

13 曲りといわれた難所だったが、最近は改良でいくらか楽になった。カーブを繰り返すたびに、新しい景観が現れ、展望が広がる。鳴子川溪谷、震動の滝も近い。

■珪藻土の白い崖

産物として珍しいのは珪藻土（けいそうど）である。珪藻の遺骸（いがい）がたい積してできたもので、駅付近をはじめ、あちこちの谷間に白い崖（がけ）となって露出している。幾重にも層となって積み重なり、層によってはたくさんの木の葉の化石を出すし、時には魚の化石も出る。『豊後国志』に魚石を産すとあるのはこれ。ということは、太古にこのあたりが水底であったことを物語っている。考えられるのは、玖珠盆地が湖だったろうということだ。地層的に見ると、珪藻土のたい積の上に火成岩が乗っている。厚く珪藻を重ねた「玖珠湖」に、溶岩の押し寄せた日の壮絶な光景が想像できよう。

明治 44（1911）年に駅付近で最初に開発され、セメントの増量材をはじめ、第二次大戦中はダイナマイトなど火薬の原料に、現在は保温材、ろ過材、

吸着剤に利用されている。最盛期には五社が採掘していたが、いまは白山工業の 1 社だけ。大分県下の珪藻土産出量は石川県に次ぐが、そのほとんどがここでとれる。

■野上氏の本領地

歴史的には中世の野上氏が存在がよく知られている。同氏は豊後清原氏の一族。清原氏については北山田駅の項で述べるが、清原氏の子孫は玖珠郡内の各地に住みつき、その土地の名を名字として武士団を形成した。

祖を正高といい、その子が正道。鶴神社が正道の廟所である。彼に三子があり、そこから玖珠衆 12 家、あるいは 24 家が出たというが、その中で頭角をあらわしたのが野上氏だった。

元寇のさいの博多防備をはじめ、13 世紀から 16 世紀にかけて、その名は史書、文献にしばしば登場、各地で勇名をはせている。野矢一中村間の南の車窓に見える丸い三群山は野上氏のとりでの一つで城山という。駅から南に行った野上墓地にいくつもの古塔がある。ゆかりのものだろうか。

＜メモ＞

周囲にある名所旧跡等
(駅からのおよその距離)

◇鶴神社（豊後中村駅から 0.5 キロ）

◇九酔溪(同 7 ～ 8 キロ)

◇鳴子川溪谷・振動の滝
(同 8 ～ 9 キロ)

◇釜の口温泉(同 10 キロ)

◇飯田高原長者原（九重山群の北の登山基地。温泉群があり、宿泊施設も多い。同 16.5 キロ）

◇牧の戸峠（九州横断道路最高点。同 22 キロ）

◇筋湯温泉（同 20 キロ）

52 引治・恵良

竜門の滝と端巖寺石仏

引治・恵良駅開業：昭和
4 (1929) 年 12 月 15 日



◀ 子供たちの滝すべりでに
ぎわう竜門の滝

■砂金の引冶金山

野上川に沿って下ってきた久大本線はトンネルで玖珠川本流に入り、両川が合流する近くにあるのが引冶駅。駅の手では、これにまた町田川が加わる。地理的には三川流域への交通の拠点という感じだが、本流沿いには集落が少ないうえ、野上川には豊後中村駅、町田川沿いには宮原線が通っているため、駅の乗降客は多くない。

駅の所在地は陣ノ内というところで、駅名と同じ中心集落は町田川を渡って左岸にある。中世には引地とも書かれ、景行天皇が館を建てるために土地を引いて平らにしたという伝説が残っている。

江戸時代には近くで砂金の採掘が行われた。特に元禄のころには幕府の直営事業となり、日田代官のもとで九州最大クラスの産出を見たという。鉾石を唐臼（からうす）でつき、ひき臼にかけ、ゆり鉢に沈殿した金をとるという方式。明治以降も断続的に採掘されたことがあり金山の地名が残る。

■豊後軍団の所在地か

久大本線と宮原線の線路が並ぶようになると玖珠

盆地に入る。盆地は三日月形をしており、その南端に近いところにあるのが恵良駅。

玖珠郡は町村合併の進んだところで、九重町と玖珠町の二つしかない。九重町は昭和 30（1955）年に野上町と東飯田、飯田、南山田の三村が合併したもの。新町名は九重山群にちなんだが、山群の南に久住町があることや、九重・久住の山名論争などもあって、ココノエと読ませることにした。恵良はかつての東飯田村の中心で、町役場も駅近くに置かれている。県内最大の酒造量を誇る八鹿酒造は駅前である。

玖珠は日田とともに九州中部の山間にあり、縦横の交通の十字路としてかなり重要な位置にあった。その面で注目されるのが駅の東部にある上旦、下旦の地名。かつて壇村とも書かれ、律令時代に豊後国に置かれた二つの軍団のうち、一つがこの地にあったのではないかと



いわれているが、確証があるわけではない。駅馬制の荒田駅は玖珠町の方らしいというが、これもはっきりとはしない。

■縄文洞穴と磨崖仏

文化財や史跡が多いのは松木川の流域である。まず二日市洞穴。玖珠郡内でも最近縄文・弥生時代の遺跡が各地で発見されているが、二日市洞穴は昭和 50 (1975) 年から五次にわたって発掘調査され、縄文早期、前期を中心に草創期から後期まで九つの文化層が明らかにされた。出土した各種土器のうち、特に条痕文土器は、これまで東九州で最古の土器とされていた無文土器より前のものを含んでいるもよう。また東九州ではただ一つの発見例という有舌尖頭器もみつまっている。

洞穴の横が瑞巖寺の磨崖仏。寺は養老年間 (8 世紀) に仁聞が創建したと伝えられ、中世に兵火にかかって焼失、再建されないままである。残っているのは石の仏だけ。高さ 2 メートルの不動明王を中尊に、矜羯羅 (こんがら)、制叱迦 (せいたか) の二童子と毘沙門、増長の二天。平安末期と考えられ、

県史跡となっている。彫法は稚拙だが、玖珠川流域の石仏として貴重な存在である。

■宝八幡から竜門へ

宝山のふもとに宝八幡社。平家の落人が宝を隠したという伝説や、山菜の宝の山が山名の起源という説もある。八幡社はかつての郷社で、宝楽 (たからがく) の名で知られる県無形民俗文化財の杖楽が伝わる。奥の院の妙見社は、湧出する水を求めて大正年間までお水取りがみられた。

竜門の滝は鎌倉時代に来日、建長寺を開山した中国の蘭溪道隆禅師が通りかかり、自国の竜門の景に似ているとしてほとりに竜門寺を建てたという。寺は兵火にかかったが、江戸時代に再建された。境内から見える滝は高さ 20 メートル、幅 40 メートル。2 段になっており、下の段は子供たちの滝すべりでにぎわう。このほか、流域には下辻の異形国東塔 (県文化財) はじめ板碑など多く、国東塔といい、先の瑞巖寺の仁聞開基伝説といい、宇佐・国東文化が山を越えて影響していることがわかる。また前辻、川上にはキリシタン墓と思われるものもあるなど、興味の多いところである。

<メモ>

周囲にある名所旧跡等 (駅からのおよその距離)

◇玖珠神楽 (引治神楽ともいい、県の無形民俗文化財。郡内のあちこちで行われるが、中心となるのは引治天満社である。引治駅から 1 キロ)

◇二日市洞穴・瑞巖寺磨崖仏 (恵良駅から 1.5 キロ)

◇宝八幡社 (同 4.5 キロ)

◇竜門の滝・竜門寺 (同 5 キロ)

◇松木ダム (同 7.5 キロ)

⑤3 町田・宝泉寺・麻生釣

高原を一両列車が走る

町田・宝泉寺駅開業：昭和12(1937)年6月27日

麻生釣駅開業：昭和29(1954)年3月15日



◀ 今では歓楽地の色彩が濃くなった宝泉寺の温泉街

■牧歌的な沿線風景

宮原線はローカル線の代表といってもよからう。明るく開けた谷間から草波の光る高原にかけて、ディーゼルカーがいかにものんびりとした姿で走る。まさに牧歌的である。

町田、宝泉寺、麻生釣。駅は宝泉寺を除けば小さい。麻生釣駅などはマッチ箱を置いたようだ。駅が小さければ列車も一両だけ。一両でも「列車」とはこれいかに一といいたところ。

ということは、赤字線の代表ということでもある。
 目下、国鉄は廃止線の有力候補にあげている。第二
 次大戦中の昭和 18（1943）年 8 月 31 日、不要線
 として一時は営業が停止され、金属供出でレールま
 ではずされた歴史を持つが、戦後 23（1948）年に
 復活したら、また廃止の檜玉（やりだま）にあげら
 れたかわいそうな線。

かつては熊本県の菊池方面と結ぶ大きな計画だったというが、抗争むなしく、熊本県に入って北里、肥後小国の駅を設けただけでストップしている。赤字だっていいじゃないか。夢のような列車をいつまでも走らせてほしいと願うのは地元の人だけだろうか。

■阿蘇と結ぶ要路

中世、町田川の谷から高原を越えていく
鉄道沿いのルートは、阿蘇地方と結ぶ重要
な道だった。町田駅近くの小倉神社は阿蘇
の神を祭っているし、麻生釣という駅名も、
それを物語っているような気がする。

また、この重要路を扼（やく）す位置に岐部城も置かれていた。岐部氏は国東半島を拠点とした紀氏の一族といわれ、国見町には地名も残っている。その氏がいわゆる玖珠衆の割拠したこの地に入って、要路をおさえていたのだ。

町田駅におりと、左と右に神社と城跡が見えるが、それ以上に、いやでも目につくのが、その背後の山。小倉岳という。標高770メートルで高くはないが、どこから見てもみごとな三角錐（すい）である。

小倉神社も、もともとはこの山の頂に勧請されたという。山頂から石器なども出土しているといい、神の山として古代から信仰されていたものだろうか。玖珠盆地から見ても、メサ山群



のなかにあって小倉岳の三角峰はなんとなく私たちの感情をゆさぶる。

■奇跡で湧いた宝の泉

宝泉寺は狭い溪間にホテル、旅館、みやげ品店がびっしり詰まったような温泉街である。

伝説によると、天慶元（938）年、全国をまわっていた空也上人がここで漁師に会い、殺生をいましめるとともに、手にした杖（つえ）を地に突き立てて去った。

やがて杖は根をおろし、枝葉をつけ始めた。さらに伸びて大きな杉の木となった。獵師はびっくり。すぐさま仏法に帰依し、木の下に草庵を結んで住むようになった。

天禄3（972）年、大地震があって、杉の根元から突然温泉が湧（わ）き出した。それがちょうど空也の入滅の日だった。不思議におどろいた村の人たちは、上人が宝の温泉を与えてくれたと感謝、前身在獵師の僧とともに寺を建立して、宝泉寺と名付けたということである。

以来、山間の湯治場として知られていたが、宝泉

寺駅の開業がきっかけとなって歓楽地の色彩が濃くなった。このほか、上流には川底温泉、下流には洞穴の温泉で特異な壁湯がある。

■道真ゆかりの天満宮

宝泉寺と麻生釣の中間には、これも著名な菅原神社が鎮座している。土地の名も菅原で、それが示すように祭神は菅原道真である。

縁起によると、ここはもと芦谷と呼ばれていた。左遷されて九州に下ってきた道真は、太宰府におもむく途中、京都で知り合いとなっていた観応をたずねて、この地の浄明寺に身を寄せ、そのさい自らの手で自分の像を彫り、残したという。

麻生釣は熊本県境に近いすばらしい高原地帯。九重山群と万年山から延びる台地が接するところである。涌蓋（わいた）山（1500メートル）の姿がこのほかい。この山は一夜にして湧き出したといわれる円頂の目立つ山。優しい山容から花嫁姿にたとえられ、雲の角隠しをかぶると里は雨になるとい。大分の人は玖珠富士と呼び、熊本の人は小国富士といっている。

<メモ>

周囲にある名所旧跡等（駅からのおよその距離）

◇小倉神社（県無形民俗文化財の町田楽が伝えられる。町田駅から1キロ）

◇岐部城跡（石垣や堀の跡が残っている。同0.5キロ）

◇宝泉寺温泉（宝泉寺駅一帯）

◇川底温泉（同駅から2キロ）

◇壁湯温泉（同1キロ）

◇菅原天満宮・浄明寺（同3.5キロ）

◇麻生釣高原（麻生釣駅一帯）

デジタルブック版

「ふるさとの駅＝各駅停車・大分県歴史散歩＝」（12）

2007 年 5 月 18 日初版発行

筆者 梅木 秀徳

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター

発行 N A N－N A N事務局

〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15

大分合同新聞社総合企画室内

このデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたウェブプロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環として作成・無料公開しているものです。デジタルブックは、ほかにも多数。ネットに接続して上記ボタンを押し、「NAN-NAN」のサイトでご利用下さい。